

TOPIX

修了生が語る ぶぎん経営幹部養成塾の魅力

ぶぎん地域経済研究所では、次代を切り拓く経営幹部の育成を目的に、2011年度から毎年「ぶぎん経営幹部養成塾」（以下、養成塾）を開講（共催：武蔵野銀行）しており、これまでに延べ400名にのぼる修了生を輩出しています。

2025年度は「次世代業績基盤確立に向けてのリレーションシップ」をテーマに、昨年度に続いて、仮想企業の経営幹部となり、事業計画を立案し他社と競い合う企業戦略シミュレーションを採り入れるなど、実践しながら経営手法を幅広く学びます。また、グループディスカッションや1泊2日での合宿研修、交流会などを通じ、さまざまな考え方や情報を吸収できる全7回にわたるカリキュラムを用意しています。

今号と次号では、昨年度、本養成塾を修了された2人にぶぎん経営幹部養成塾の魅力について話を伺いました。第1回はTBLD株式会社の馬場さんをご紹介します。



「2025年度ぶぎん経営幹部養成塾」は2025年10月開講予定です。

2024年度 修了生

TBLD 株式会社

シャトレーゼ川口里店 副店長 馬場 貴由実 氏



——まずは、経営幹部養成塾に参加されたご感想をお聞かせください。

毎月1回を半年かけて行う大規模な養成塾に参加するのが初めてであったため、どのような授業を行い、どのような参加者がいらっしゃるのか、とても不安と緊張でした。初回の研修で参加者全員と名刺交換をする機会を設けていただき、様々な職種や役職の方々が参加していることがわかり、自分と他の参加者との共通点が少ないことにさらに不安が大きくなりました。そんな中、2回目の研修が研修初導入のパソコンを用いた経営シミュレーションゲームと聞いて、ゲームが好きな私は泊まりの研修でも頑張れそうと思いました。実際に2回目の研修に参加して、班のメンバーと話し合いながら会社の資金繰りの難しさを身をもって体験できました。

3回目は自社PR発表をする研修でした。会社の事業や歴史などを改めて調べる機会であり、今まで知らなかったことが多いことにも気づかされました。発表時にはお店の人気商品ランキングなどを紹介でき、班の方々だけでも興味を持ってもらえて嬉しかったです。また班の方々の会社をより詳しく知ることができ、1回目の研修の時とは違い、様々な職種や役職でも経営の知識を身につけ、会社で活かしたいと思う気持ちは参加者全員一緒であることを改めて感じることができました。

3回目後半から最終回までは経営をしていくうえで「ヒト・モノ・カネ・情報」から改善案を出し、会社の存在価値や企業理念に沿って中期ビジョンを価値判断し設定していく講義でした。設定したものを行動計画という形で細分化し動きに落とし込んでいく作業をしました。会社という大きな組織で中期ビジョンを達成していくには普段の仕事内容までの細かい行動計画になることを知り、普段の仕事内容も会社経営の一部であることを再認識することができました。全体の研修を通して、経営は会社のトップの人達だけであるだけでなく、会社に関わる全ての人が携わり世の中での存在価値を見

出すことで成り立つと考えました。私の職場はほとんどがパート・アルバイトの方々であり、数人の社員で指示をしながら店舗運営をおこなう仕事のため、会社の経営指針に沿い、細分化した行動計画を的確に指示できるようになりたいと思いました。

——今回、養成塾に参加することになった経緯について教えてください。

社長から養成塾の紹介をしていただいたことがきっかけです。私自身が様々な店舗に携わってきたため、より良い店舗運営のために経営の研修を推奨していただき、この度参加することになりました。

——全体の講義を通して、馬場さんが一番、勉強になったことは何でしょうか。

私は日頃、店舗で接客をしながら商品発注や在庫管理の業務をしているため、養成塾2回目の経営シミュレーションゲームが普段の仕事に似ている部分があり、勉強になりました。またゲーム内では人材採用に注力したり、研究費にどのくらい費用をかけるかチーム内で相談したりと、普段の業務では気づかない部分にも多くの「ヒト・モノ・カネ」が関わっていることを改めて実感することができました。

——講義を受けられる前、ご自身で一番、学びたかったことは何の講義でしょうか。

講義を受ける前は経営というもの自体がおおまかなイメージでしかありませんでした。そのため特にこの講義が学びたいというよりは、養成塾全体を通して経営そのものを学べたらという気持ちでした。

——半年間の講義が終わり、ビジネスの現場に戻られる中で、養成塾で学んだことを、今後、どのように活かしていきたいとお考えですか

私の業務が店舗運営のため、まずは店舗という小さく縛りのある中ではありますが、行動計画をたてて、売り上げ成績を伸ばしていくように努力したいと思っています。